

第4回 鶴岡市SDGs未来都市デジタル化戦略有識者会議 (会議概要)

- 日 時 令和3年12月23日 午前10時00分から
- 会 場 Zoom (オンライン会議)
- 出席委員 天野 隆興 委員、大西 宏昌 委員、大橋 康史 委員
神尾 文彦 委員、佐藤 理沙 委員、佐藤 涼子 委員
渋谷 真子 委員、渡会 俊輔 委員、渡辺 理絵 委員
- 欠席委員 渡邊 賢一 委員
- 傍 聴 者 5名
- 次 第 (1) 鶴岡市デジタル化戦略(素案)について
(2) その他

協議事項

○座長

ローカルハブとウェルビーイングコミュニティが大きなポイントになっている。ウェルビーイングコミュニティは市民の方々に密着するキーワードだが、ローカルハブは中長期的な観点で都市の成長に関わるものであり、鶴岡の特徴を示している言葉だと思うが、実際にビジネスや雇用、市民の生活にどうつなげていくかが施策に求められていることだと思う。

○委員

外から見た鶴岡の魅力の見え方と、鶴岡に住んでいる人から見た見え方は違うはずなので、市民目線なのか関係人口目線なのかを改めて整理しないと誰のためのデジタル化なのかというところがぼやけるのではないかという懸念がある。この戦略は一見してすごくいいことを書いているが、市民目線の部分と外から見た部分とか、もう少し何かピンポイントに伝わるのがあるといい。

デジタルの実装を担うという立場からみると、データの地産地消の産学官連携の産の部分に悩ましさがある。鶴岡ならではの個別カスタマイズすると、東京のベンダーではコストが合わないし、安さを求めれば標準的なプラットフォームでいいので他と差がなくなる。一方、データの地産地消を作るにあたり、ローカルに受け手があるのか、それをどう育て、持続的に実装して良い街を作り続けるのかというところがクリティカルなミッシングパーツと感じたのでその施策が必要と思っていた。多分1年2年で効果はでないと思うので、気長にどう育てていくのかということと思った。

○委員

この資料をそのまま市民の皆さん向けにオープンにするのか分からないが、この場での議論や市役所内部の検討用としては分かりやすいが、個々のデジタル化サービスをただ羅列したイメージがあり、市民の皆さんにオープンにしても自分たちの生活や

鶴岡という地域がどう変わるのかが分からないという印象がある。鶴岡市の特性を生かして分野横断で地域全体をデジタル化して変えていくというストーリーを示すことができれば、市民の皆さんにも分かりやすくイメージしてもらえらると思う。例えば、鶴岡で盛んな農業分野で、ワーケーションで来た人が農業のお手伝いをし、そのお礼をデジタルの地域通貨で支払う。そのお金で地域の観光、宿泊、ショッピングを楽しめば滞在日数も伸びる。それで鶴岡っていいところだと感じてもらえれば将来的な移住の促進につながるかもしれない。タイミーといった民間のサービスのよう、首都圏にいるが、田舎に観光にいきながら農業を楽しんでみたいという人と実際の現地の農作業を結びつけるサービスといったものも活用しながら、実際に地域がこう変わるというストーリーを示せば、市民の皆さんも参加してみようという気持ちになるのではと感じた。

○事務局

確かにこの資料は有識者向けであり、難解な部分が多々あると感じるので、市民向けにオープンにする時はストーリー仕立てとしより自分ごと化できるよう伝えていく必要があると考えているので、デジタル化戦略推進室では、市民向けに別の媒体でも伝えることを企画検討している。その際は、施策の羅列というよりも、分かりやすいものをいくつかピックアップした方が身近に感じるかと考えているので、そのように進めさせていただければと考えている。

○座長

地元の特徴として、風の問題、風に強いインフラの在り方をどうするべきか、あるいは再生可能エネルギーとして太陽光は安定的に電力供給しにくいといったことがあると聞いている。鶴岡の新しいベンチャーを生み出すという風土を生かし、うまくその課題を克服するようなビジネスの種を作り上げていければいいかと思うが、地域課題の技術開発、研究開発はかなりされているか。

○委員

地域発展の観点では、高等教育機関としては地域貢献に情熱を持てるような人材を育てていくということをやらなければいけない。学生がアイデア、起業のネタを創出し、授業やワークショップをするが、やはりこれは当たる当たらないがあるので、数を打っていくしかないと感じている。

先週に学生から聞いた意見であるが、鶴岡の各企業がやっていることは分かるが、どういうビジョンを描き、今後どうなるのかということ発信できている企業がないのではないかという話があった。そうなる魅力を感じにくいので、地場の企業や鶴岡市がどう発展していくという夢を与えるフレーズを発信できるかというのは非常に重要なところと感じる。

○座長

ローカルハブという観点において、鶴岡高専や山形大学や慶応大学のような学術機関の存在は非常に大きく、地域の魅力や企業のビジョンをどう共有するかという問題があるが、ここにデジタルが貢献できるか。

○委員

学生目線であるが、対面で知りたい部分はあるものの、きっかけとしてはYoutubeのようなデジタル媒体で企業の情報を発信してほしいというところがある。

学生目線、市民目線で市や企業が情報を発信することがわりとなかったと思う。学生から言わせると、企業が言いたいことをしゃべっているだけで、知りたい情報は一切ない、とのこと。双方向にやり取りするのも実際できているようでできていないという。そこは実はリアルの部分でビジョンのすり合わせができていないというところが大きい気がする。

○座長

ウェルビーイングに関して、鶴岡は東北一広い面積を持ち、中山間地も多いので、個人情報問題は難しいところがあるが、ちょっと踏み込んだデータをもらい、その活用を検討したうえで、移動や健康管理、医療などにおいて、通常の自治体が行うサービスよりもさらに踏み込んだサービスを展開するというのも鶴岡らしさの一つと感じる。そのようなメッセージがあってもいいかと思う。

○委員

鶴岡は東北一広い面積を持っているので、計画にあるように公民館をハブとして地域コミュニティを作っていくことは非常に重要と思った。住民からデータを提供してもらうとなると、参加する方も身構えてしまうところがあると思うので、健康マイレージみたいな形で日々の活動を促す中で、本人の同意を得てデータを集め、地域の企業で利活用していくモデルなんかであれば、データが回るのではないかと思う。健康を一つの切り口とすれば、健康に携わる人たちを集積する仕組みと市民の健康データを提供できるということで新しい産業を呼び込み、そのようなサンドボックス的な事業を支援するような仕組みを行政としても提供していいのではないかと感じた。

○座長

健康や環境というのは主体性が難しい。無意識に環境に貢献する行動を取るようによく情報提供したり、まちづくりの構造を変えたり、地域交通機関を整備したりということをやっている自治体もあるが、データによって健康をどう維持向上していくのかというのはすごく大きなポイントとなる。KPIに医療費の削減を掲げている自治体やコンパクトシティとセットで展開している自治体もあるので、市民から見るとデータの連携によって何が利益になるのかちゃんと示していかなければならないと思った。

地域の競争があり、何もしないと競争に巻き込まれて負けてしまう、ということに対し、どちらかというところと協調や連携を重視すべきではないかという意見をいただいた

が、コメントいただきたい。

→委員

資料に初めて競争という言葉が出てきて少しびっくりしたが、鶴岡だけで考えずに庄内地域として考え、酒田市や三川町などいろんなところとデータ共有できるのではないかと思った。

→座長

山形県も含めて全体で一緒にやった方がいいということもあるか。

→委員

内陸は別であり、やはり庄内が一つではないかと私は思う。

→事務局

競争力というより、社会全体がデジタルで変化する中で、これに対応する対応力が問われている。結果的に地域内外の住民や企業から選ばれる都市となる契機となるのではという意味でこの表現をさせていただいた。デジタル部門において庄内地域全体での連携はないが、よいものは積極的に取り入れ、情報交換しながら進めていきたい。

○委員

デジタルが身近に感じられるものの例に鶴岡市公式LINEやテレビ等で話題になっているワクチンの接種証明書がある。地域住民がその登録に手間取り、私もサポート対応に追われたところであるが、LINEでゴミ出しの通知を受けとったところ、非常に分かりやすかったという声も聞くことができた。また、防災無線で流れた注意や、消防車が3、4台出動した火事騒ぎなんかも、風によっては住民が聞き取れず、後になって問合せがあって対応することもあった。こういうのもLINEで通知がきたらいいのに、という地域住民もいて、こういう身近なところからデジタルに慣れることが必要なのではと感じた。

○委員

デジタルのプラットフォームみたいなものは今後も作られるようになってくると思うが、いわゆるデジタル弱者の方たちが参加できる仕組みも必要だと思っている。一方で、誰でも参加できるものというところだけを重視してしまうと、システム自体がチープなものになって利便性が損なわれ、最終的に誰にも使われなくなって失敗するものもある。資料にもあるが、利益と使える人の最大公約数を取り、そこから漏れてしまう人は人の力でサポートするやり方がいいのかと思う。鶴岡は地域コミュニティがしっかりしていると思うので、地域のデジタルお助け隊みたいな、その地域でちゃんと自助できるような仕組みを作ってあげることが大切だと思う。これから定年をむかえるなどで、地域との関わりが強くなる方は、現役時代にパソコンやスマホを使ってい

た方なので、そういう人たちが地域のデジタル弱者をサポートする仕組みを作ると、
どんどんデジタルの裾野が広がっていくと思っている。

○委員

話を聞いていて思ったことを何点かお話しさせていただきたい。

まず、鶴岡らしさはそこまで必要なのかと思った。鶴岡らしさを追求しすぎた結果、
必要性がわからないものができるのが怖い。デジタルをすごく活用している市を作り
上げますよ、と掲げること自体が他との差別化を図るものとなり、他の地域にも認め
られるものが作れると思う。

市民がデータを渡すというのは本当に難しいと感じる。例えば、歩いた歩数分のポ
イントが還元されるみたいな事例を聞いたことがあるので、それを市民向けに活用し
てみれば、必然的にデータが渡されるし、高齢者の歩数履歴から安否確認もできるか
もしれないし、ポイントで経済も回せるかと思う。そういった施策でデータをもらい
やすくするという考え方もあるかと思う。

防災に関しては、朝日地域や櫛引地域にはケーブルテレビがあり、防災無線のほか
に家に小さなスピーカーがついていて、そこから火事情報なども流れ、結構分かりや
すいと感じる。デジタルと絡めるなら、iPadのようなものを備え付け、遠隔診療や防
災の通知など、目でも耳でも分かるようにするのはどうか。それを普及させるために、
数年間教える人を配置する委託をして雇用を生み、お金を回せば関係が広がるので
はないか。また、鶴岡の若者はラーメン屋などの飲食店を開ける人は多く、地元にい
ながら鶴岡を発展させたいと思っている若者の事業者はたくさんいるが、その人たちの
意見がこのデジタルのところに反映されていないと感じる。鶴岡らしさを求めている
わりには、鶴岡のこれから頑張ろうと思っている人たちの意見が吸い取られてない
と思うので、若手の事業者の意見を聞く場が必要ではないかと感じた。

→座長

どうしてもトップダウンのアプローチで全体を組み立てている側面が強いが、ウェ
ルビーイングと言うからにはボトムアップできちんと意見を収集しながら、層を厚く
する施策をしていかなければいけないと思う。ポイントに関して、こういうことをや
れば健康寿命が延びますといった、加工された情報を提供するだけではダメで、やは
り地域通貨などお金に関するインセンティブを与えるのが一番有効だと考えるか。

→委員

鶴岡全体や企業全体にプラスになるから情報提供しようという人はあまりいないの
ではないかと個人的には考える。ポイントもらえるのと一緒にしないと提供しないの
ではないか。

○委員

人材リソースという点であるが、デジタル社会を目指すもう少し大きな自治体や国、

経産省あたりが久しく行っていることかと思う。例えば、消費者がもたらすデジタルリソースを販売戦略などにフィードバックさせて自社の利益を上げる好循環を生むのが理想だが、わりと大企業に偏っている実情があり、中小企業はその技術とスキルと人材がなくてできない、と、この三つの欠点があるとよく言われ、鶴岡市のデジタル戦略の中でも縮図として現れる可能性があるかと危惧する。地域の高等教育機関で作ったデータや技術を実際買い取って活用してくれる企業が非常に少ないという実情があり、そこがうまく克服できれば、農業分野であれば農業就業者の増加というところにも寄与し、かなり大きな展望になると思っている。

鶴岡市の強みとして高等教育機関の存在がある。高等教育機関があれば一定数の学生は必ず流入してくるが、その学生の大多数は卒業後、鶴岡市を出ていくので、一定数が鶴岡に留まる仕組みというか、傾向を見出せれば大きな影響を与えたいと思ひ、これを課題として取り組んでいる。この戦略の中で起業を想定しているところがあるが、二十代前半の学生が起業に踏み込むことはなかなかできない。既存企業の方がよほどいい受け手になるが、デジタルの技術やノウハウが確立されてなかったり、あっても学生に届いてなかったりというミスマッチがおきて、結局鶴岡を出ていくということがある。データの地産地消を目指すためには、人材リソースをどう考えるかということに一定の戦略が必要か考える。

→座長

人材リソースの戦略において、いま鶴岡市に住んでいる人たちにリソースになってもらう、あるいは外から呼ぶという形もあるだろうが、鶴岡市に一番マッチした方向はどうか。全体のIE人材は地域も大都市圏も官庁も民間も国も知事対も全部不足している現状があり、この状況はしばらく続くと思っているがどうか。

→委員

鶴岡に所在する教育機関がデジタル対応にどれだけ教育力を向けられるかということがあると思う。山形大学であれば、AIに関する教育の必修化、実用化を取り入れているところもあるが、それをより強化し、社会に出ていけるようなIT人材を育成することになるかと思う。

また、鶴岡市においてはIT企業ももちろん射程に入ると思うので、より選ばれるというようなところに重点を置く必要があるのかなと思う。

例えば、デジタル関係人口にも関係するが、鶴岡市で成人式を迎えられた方は潜在的な関係人口になると思う。成人式のときにQRコードみたいなものを渡して登録を呼びかけ、定期的に鶴岡市の魅力的な情報などを発信し続けていくことで、そういう人たちをキャッチしておくことが大事。競争がより厳しくなり、デジタル情報が氾濫する社会の中で、どう自分たちが発信したい情報を届けるかということが大事になってくるので、早い段階から関係人口づくりというところに敏感になることになると思う。

○座長

関係人口の話は重要なポイントであり、最初の関心を持つ層をどうキャッチし、どう接点を持つか。そして母数を増やしていった中で、どうその人口を生かしていくかという考え方が重要かと思うが、実際に移住になると手続き面で障壁があって、なかなか移住する情報が入ってこないとかもあるか。

○委員

鶴岡に来なくてもデジタルで手続きできるといいということもあるが、来る前に鶴岡に知り合いができていと来やすいというものもある。地域振興課が主催で移住希望している方と鶴岡の現地をつないでオンラインで話す会があったが、その場では鶴岡がどういうところといった話や、今度来た時に会いましょうというような話もしていた。こういうことで移住者とのつながり、関係人口が増えていくといいのではないかと思う。

○事務局

リソースをデジタル上でつなげる外部で補完していくといい側面もある反面、やりすぎてしまうと地元の人たちのやることを奪ってしまう危険もあると思っている。どんどん増える傾向にあるデジタルでつなげる人とリアルに鶴岡に住んでいる人とどう調和をとるのかというのが、今後全国的にも課題になってくると懸念している。

○委員

国においてもデジタル田園都市国家構想の中で地方創生型のテレワークを整備していくという方向に大きく予算割り当てしていたりもするので、ワーケーションをうまくつかって関係人口を増やすというのも面白い取り組みかと思った。

○座長

デジタルでつなげる部分とリアルの空間を生かして環境を作って意識の連携を図り地域の活力にしていく。それをデジタルの基盤ができる中で、そこに載るアプリケーションや実際の地域活動をどうオンさせて、個性、文化などを重視しながらボトムアップの地域づくりをどうするのかというのは国の大きな方向性として出てくる。鶴岡市はポテンシャルがあるので、その施策を検討していくという意見もあった。県や広域のデジタル戦略とどう関連させていくとか調整しなければいけない部分もあるだろうが、まずは鶴岡市としてのデジタル戦略を大きく打ち出していくことが重要かと思う。それに対する広報の仕方、誰にどう分かりやすく伝えていくのかは重要なポイントだと思うので、また最終回に意見をいただきたいと思う。ローカルハブは非常に重要なコンセプトと考えるが、それをしっかりストーリーをかけて市民に伝えていく一方、市民が今活動しているところにしっかり対応してボトムアップのデジタル化戦略を作ることが、引いていけば鶴岡らしさにつながるという意見もあった。その構成の仕方、ストーリーについては再度事務局と相談しながら工夫していきたい。どこと競

争するかというところに焦点をあてるよりは、地域の対応力を持って、デジタル化戦略を鶴岡発でナンバーワンになる気概で実装基板を作っていくような大きなメッセージ性を出せればと思う。

研究、ベンチャー、人材といろいろこれからの運用で課題があると思うが、リアルも含めた様々なコミュニティで会話しながら、デジタル化の効果を高める取り組みも併せてしていかなければならず、それは住民へのサポートやコミュニティ単位の様々な取り組みや既存の便利な基盤をうまく活用することにも配慮しながら展開しなければいけない部分もあるかと思った。

データのみならず、ビジネスや人材の地産地消などいろいろな要素がそろわないと市民の理解が及ばないところがあるかと改めて思った。

いただいた意見はなるべく戦略に落とし込んでいきたいと思っているし、具体的な進め方についてもまた引き続き意見いただければと思っている。